

第4回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

平成29年10月31日(火)10:00～12:00

2 開催場所

広島市役所本庁舎14階 第7会議室（広島市中区国泰寺町一丁目6番34号）

3 出席者

懇談会構成員

団 体 名 ・ 役 職	氏 名
広島市立大学広島平和研究所 副所長	水本 和実
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
特定非営利活動法人ひろしまジン大学 代表理事	平尾 順平
被爆体験証言者（平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事）	原田 浩
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長	辻 孝和
広島市市民局国際平和推進部 部長	津村 浩
広島市経済観光局観光政策部 部長	阪谷 幸春

（計7名、2名欠席）

事務局

観光プロモーション担当課長、課長補佐、主査

株式会社JTB中国四国営業企画課長、地域交流推進課ディレクター（計5名）

4 議題

- (1) 第3回懇談会における意見を踏まえたピースツーリズム推進の「目指す姿の方向性」と「今後の検討の方向性」について
- (2) 具体的な検討内容について
 - ① 情報発信について
 - ② 丁寧な案内を提供する環境づくり（ルート設定等）について
 - ③ 迎える市民の積極的な関与について
- (3) ピースツーリズム推進に際しての配慮事項や対応が必要な事項について
- (4) その他意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

3名

7 会議資料名

資料：ピースツーリズム推進懇談会（第4回）

8 発言の要旨

（原田座長）前回までに色々なご意見やご提案をいただき、感謝している。広島市行政に提言できるようにまとめていきたい。今回も多くのご意見をいただきたい。

《事務局から資料に基づき説明》

◆第3回懇談会における意見を踏まえたピースツーリズム推進の「目指す姿の方向性」と「今後の検討の方向性」について

(原田座長) 昨日の会議で松井市長から、文化事業等においても平和の発信方策を検討してはどうかとの発言があったと聞いている。市長は、平和について、狭義なものではなく、もっと広義に捉えている。本懇談会としてもこれに応える内容の提言をすることを進めていきたい。

被爆 50 周年の時に、『ヒロシマの被爆建造物は語る』を出版した。被爆によって市街地の全てを失っていたため資料収集は困難だったが、広島メッセージだけを発信することにとどまらず、国内外の戦争遺跡についても記録していこうと取り組んだ結果、400 ページほどのボリュームになった。これは行政職員の努力だけでなく、写真や情報の提供など市民の大きなささえがあった。今では行政に携わる職員からは平和行政のバイブルとして使っているという発言もあり、当時の成果として受け止めている。

この時期には、もう一つ、『ひろしま 21 世紀へのはがき』事業を行いとりまとめた。これは、1995 年に、被爆 100 年(2045 年)に向け市民がどのような思いを持って生きようとしているのか、自分の子どもの成長など家族に対してのメッセージなどを集める目的ではがきによる投稿をお願いした。毎日のはがきが集まりはじめると、その内容に心を打たれることになった。当時の市内の世帯 40 万に対し 10 万通ほどのはがきが届いた。4 世帯に 1 枚のはがきが届いたのである。あれから 20 数年経ったが、この本には、はがきを出した市民の辛い思いや将来の子どもへのメッセージが数多く詰まっており、今でも市民の方々の思いが伝わってくるし平和行政を進めていく大きな原動力となった。

(水本委員) 目指す姿の方向性について、「国内外の来訪者が、広島の、」に続く 3 項目の中に、キーワードとして、「被爆体験の継承」という言葉と、「核兵器のない世界を訴える」という内容を盛り込んだ方がよいのではないかと。また、今後の検討の方向性の情報発信について、「将来はリアルなものをめざすが、まずは、バーチャルに」、と時系列の論理構成で書かれているが、そのような表現よりも、「最終的にリアルな内容を伝えることの重要性を認識した上で、手段としてはバーチャルも含めて色んなものを検討する」という風な表現の方がよいのではないかと。

(辻委員) 平和について広島だけで考えるのではなく、広島を中心として長崎やアウシュビッツなど他の視点も入れたピースツーリズムを推進していくという方向性ができないか。ヒアリング調査の中でも、そのような視点の意見がある。

広島県では、広島に来て観光していただき、お金を落としていただいて、市民も満足するという、「観光プロダクト」を考えている。商品化というと、平和を商品化するのかという意見もあるが、来訪者に平和を伝えることに従事する人についても、経費がかかる。センシティブな問題ではあるが、商品化ということと、平和をどうするのかということが歩み寄る必要があり、それをどうするか。自転車やバスで回る案があるが、誰が対応するのか、そのお金をどうするのかという問題があり、受益者負担という形で、実際に旅行された人が一部負担するということが商品化である。また、宣伝も必要である。ただでは情報発信できない。センシティブな問題ではあるが、組み立てて知らしめて来ていただくには、地元の人が少しお金をいただかなければならず、その方向性を決めておいた方がよい。ピースツーリズムをどこまで進化させ

るか。

大阪では 2025 年に万博を誘致しようとしているが、その年に広島では被爆 80 周年となり、何をするのか、そこまでの方向性を考えることが必要ではないか。被爆者の方々は少なくなっていく中、80 周年に遺していく仕組みを今から考える必要がある。

(渡部委員) 辻委員の言われたことは非常に大切なことだが、私の意見としては、広島市がピースツーリズムについて発信する時、商品化を強調しない方がよいと思っている。広島県が既にしているので充分である。広島市のスタンスとしては、あくまで、ピースにきちんと軸足を置いて発信し、市民とともにどう持続可能にしていくか、伸ばしていくかを知恵を出し合おうという発信の仕方が望ましい。そうでないと、いとも簡単に反転し、商業化、経済化が優先されてしまい、ピースが形骸化する。そうってしまった時、世界から見た広島の街の価値は下がると思う。これから、100 年、200 年先を考える時に大事なポイントだと思っており、そういうことをきちんと腹の中に据えて、このピースツーリズムについて議論を行った方がよい。辻委員の言われたことはとても大事なことであり、こここそ知恵の出どころだと思う。市民に伝える時にも、立ち位置を明確にし、大事に伝えていかなければならない。2025 年になったら被爆者の方はいらっしゃらないかもしれない。だからこそ、伝え方について、大事に丁寧にすることが重要だと思う。

目指す姿の方向性の、市民が協力していくピースツーリズムという部分に関して、人がいないとツーリズムは成り立たないと思うので、“市民と共に”という表現がよいのではないか。“丁寧な”という文言が入ったのはとてもよいと思う。

今後の検討の方向性の情報発信について、情報発信というとスマートフォンやパソコンという話になりがちだが、本当の情報発信はそうだろうか。人にきちんと伝えるには、口コミが一番大きいと思う。はじめにリアルがあり、リアルを届けるための伴走者としてバーチャルな情報発信があるという形を目指してはどうか。バーチャルな世界に詳しくないので、そういうことができるのか分からないが、いくら端末で情報を得ることができても、人間がどこに惹かれるのか、どういう情報に心が動くのか、それが大事であり、むしろその検討が必要ではないか。

(平尾委員) ピースツーリズム推進懇談会の会合を今まで 3 回行ってきたが、「ピース」と「ツーリズム」のバランスが難しいと思う。誤解を恐れずに言うと、「ピース」とは、広島に来た人に考えてもらいたいこと、持ち帰って議論してもらいたいことだとすると、「ツーリズム」はそのための手段ではないか。目的としての「ピース」のために、どう「ツーリズム」をうまく導入、活用していくかだと思うが、ここでは目的と手段の議論が行ったり来たりしている感じが、難しいなと思っている。何が目的で何が手段だったのだろうかということになった結果、何が大事だったか分からなくなる。現在議論をしているスマートフォンを使う、マップを使うといったことは手段であり、何をするためにそれをしないといけないのかということ、毎回はっきりしておかないとぶれるのではないか。広島を訪れる人にどういう変化や行動を起こしてもらいたいのか、しっかりとした具体的な言葉にしたうえで、そのためにはどのような手段、コンテンツが必要なのか、という流れで考えていったほうが、クリアになるのではないか。

(津村委員) 水本委員が言われた被爆体験継承と核廃絶に向けた取組について言葉で示したほう

がよいということは、そのとおりだと思う。ピースとツーリズムの重点の置き方は、難しいテーマだとは思いますが、ベースはやはり平和である。来た人に被爆の実相に触れていただいて、丁寧な説明をして平和への思いを共有していただくということがぶれないベースとしてあるべきだろう。平和推進の行政を担当している者としても、一市民としてもそう思っている。ただ、広島を訪れるほとんどの来訪者の目的地は平和記念公園、平和記念資料館であるので、既にある意味商品化はされていると言えるのではないか。コストと対価については、整理すべき部分はあると思うが。現実にはそのような状況がある中で、さらにそれを広げて平和への思いを共有していただける人を増やしていくということだろうと思っている。ピースとツーリズムは切り離せないものであり、ベースはぶれないようにしておいて、調和をうまく図りながら持続可能なものとして広げていくことが基本的な考えだと思う。

(前田委員(事務局より代理発言)) 目指す姿の方向性の、「そのために、来訪者が広島に関する情報をしっかりと受けとめ、考えられるよう、市民が協力していくピースツーリズムを推進していく。」という部分について、これは①「来訪者が広島に関する情報をしっかりと受けとめ、考えられるよう」にするということと、②そのことに「市民が協力していく」よう仕組みを考えていくという意味合いであったかと思うので、例えば、「来訪者が広島に関する情報をしっかりと受けとめ、考えられるようにする。また、それに市民が協力していけるようにする」といった表現にした方がよいのではないか。

(阪谷委員) 目指す姿の方向性と今後の検討の方向性についての文章の修正の議論については、今いただいたご意見を元に座長と調整することとし、今回で終結させていただく方向にしたい。

ピースとツーリズムという点について、第1回懇談会でお示ししているが、本懇談会の開催要綱において、まず本市を訪れた方に「平和への思いを共有していただく」と記載しており、これがベースとなる。平和への思いを共有していただくには、被爆の実相を見てもらうことが必要であり、そのためにルートを作っていくということである。ツーリズムは目的に対する手段であり、手段を具体的にどうしていくかということで、バーチャルな発信や、市民による発信など色々あると思う。その中で、辻委員の言われたように、広島に来ていただく手段として、旅行業者の方など企業の皆さんが関わるものもあると思う。渡部委員が言われたように、市民の方からどんどん発信して来ていただくという手法もあるし、NPO法人から発信というものもある。手段については様々な方法があると認識している。皆さんおそらく共通のことを言っていて、強弱をどうつけるかという話だろう。私は配分は同じくらいに考えてもよいのではと思っている。目的と手段はの中で改めて共有していきたい。辻委員が言われた進化について、広島市としてはピースツーリズムを進化させていきたいと考えており、作るだけで満足するのではなく、市民や来訪者、そして我々の中でもう一度検証して、さらによりよいものにしていきたいと考えている。さらに多くの方に広島の平和への思いを共有していただきたいというのが我々の考えである。

そして、ピースツーリズムを運営していく費用や組織をどうしていくのかということについては、今後の課題だと思っているので、すぐ結論は出ないが、しっかりと受け止めて考えていきたい。

(原田座長) 皆さんに大事な視点をおさえていただいた。私事だが、懇談会の委員に就任し

たことについて、色々な意見を受けてきた。平和を観光に使うのか、そう結び付けをすることはやめるべきだなど、被爆者や、他の方からもご意見をいただいた。阪谷委員が言われたように、大切なことは①世界にいかにして広島のパラレルの情報を発信するか、②それによって多くの人々を広島に迎えることにつなげるのか、③迎えるにあたっては市民がどのように対応していくのかなどを集約していきたい。

辻委員の言われた、アウシュビッツ博物館の進め方の問題については、平和記念資料館（以下、「資料館」という）も参考にしたいと情報収集をはじめている。また、長崎についても情報発信の取組などを参考にするのは結構なことだと思う。

いただいたご意見を集約していきたい。

◆具体的な検討内容

①情報発信について

（原田座長）平和と文化の事業をとりまとめて発信することがより効果的ではないか。市には平和文化センターという組織がある。できたのは昭和 42 年で、当時は市の機構として、平和文化センターという局相当の組織だった。その後、昭和 51 年頃に財団として設立した。名称は平和文化センターとなっているが、文化財団の発足後、文化事業は文化財団に移管してきた。したがって、平和文化センターでは文化事業はなく、国際と平和事業を所管した財団として運営している。平和と文化事業の発信の機能としては、資料館、現代美術館、それに文化事業を総括的に発信するアステールプラザ（文化財団事務局）に集約されている。そこを情報発信基地として使っていく必要があると考えている。市民局ではヒロシマ賞を所管しているが、これを受けて、現代美術館で企画展を実施している。今年は 10 回目を迎え、これまで三宅一生やオノ・ヨーコなどが受賞している。ヒロシマ賞を選考するにあたっては、現代美術を通じて平和を発信する作家を顕彰する制度であり、世界各国から推薦いただき、その中から、選考委員が最終的に一人に選ばるという過程を経ている。受賞者が決定すると翌年に個展を現代美術館で開催する。全体の経費は 8,000 万円くらいだと思うが、個展の入場者は 6～7 千人程度であろうか。もっと市民を巻き込み、さらに国内各地、海外からも呼び込むようなものにしていく必要があるのではないかな。つまり平和文化事業を通じて広島のパラレルの発信機能として強化する必要があるのではないかな。もう一つ、文化財団が所管する事業に、アニメーションフェスティバルがある。ここにも、アニメーションを通じて平和を希求する作家を顕彰する制度としてヒロシマ賞を設けている。これは、世界中からアニメーション作品を集め、国際選考委員による公開審査を経て、ヒロシマ賞が授与されている。この事業にも相当の経費がかかっているが、この事業に深い関心を持っている人は集まってくるが、一般の市民にはなじみが低い。ピースツーリズムを進めるにあたり、こういうことも含めて議論していく必要があろう。現代美術のヒロシマ賞は、今回 10 回目となり、平和大通りにバナーを、本通り商店街に大きな懸垂幕を出したりしているが、市民の関心がやすい。

（水本委員）発信を最終的に何につなげるかということ、リアルな現場である。足で歩いて、リアルな情報、リアルな物、リアルな人々の物語、歴史の経験につなぐための発信であって、つなぐための手段はバーチャルなものであってもよいが、最終的にはリアルなものにつなぐということが大切である。最終的に提供するコンテンツもリアルなものがよく、その中に文化活動と

いうものもあってよいと思う。

(辻委員) スマートフォンで情報発信するという案を事務局が考えているが、若い人はユーチューブやInstagramなどによりビジュアルから入って、そして深く入り込むパターンになっている。従来型のホームページのようなやり方では、彼らの関心を惹かない。リアルなものにつなげるには、あまり説明の多くない、インスタ映えするというような訴え方をした方がよい。難しいコンテンツではあるが、実際にそこに来たい、実相を見てみたいと思ってもらえる引っ張り方が必要であり、長々と文章で説明するようなものではない。今のコンテンツはどのくらいあるのか、コンテンツも選ばないといけない。具体的にルートを回る計画なので、ルートを回ったときにどういう情報を見られるのかということろまで、事務局は大変だろうが考えてほしい。現地で感じてもらうという肝の部分なので、コンテンツのあり方をもう少し具体的に考えてルートを検討する必要がある。

(渡部委員) 原田座長から話のあったアニメーションフェスティバルと現代美術館は、非常に大きな情報発信源になり得るものだと思うが残念ながら、発信源になっていない。非常に良いもののなのに、取り組みが市民に対してクローズになり、国内外に広く情報発信されていない。アニメーションそのままだが素晴らしいコンテンツだと思う。辻委員の言われたコンテンツを作る、つまりアート作品をたくさんヒロシマで作っていただく仕掛けを作って、その作品を通じて、広島を発信するというのは、これは従来にない広島の発信だろう。広島に行ってみたいと思ってもらえる、関心を持ってもらえる発信の仕方である。文化の力はすごく大きい。せっかく、これほどよい大会があるのに、市民にいまひとつ浸透しておらず、アニメーターが育っておらず、広島の情報発信につながっていない点を考えていく必要がある。アニメーションフェスティバルが十分な情報発信源になり得ないことが、なぜなのか考えていくことがとても大事なことはないか。事務局があまりにたくさんのかんことを受けて大変になることを分かっているが、事務局を信じて発言している。もう一つは、コンテンポラリーアートはすごく訴求力があり、そのために、現代美術館ができたのであろうに、これも閉ざされていてもったいない。広島でアートを通して平和を発信したい若者はたくさんいるのに、その人達が、発表する場、研鑽する場、つくる場がない。それがもったいない。そういうこともあわせて現代美術館が機能することができれば、現代美術館そのものが情報発信源になり、今までになかった新しい形で広島を発信できるのではないかと。情報発信は狭く考えないほうがよい。

(平尾委員) 自戒をこめてだが、イベントなどを継続して主催していると、いつのまにかイベントを開催すること自体が目的化してしまい、自分達は何のためにこのイベントをやっていたのだろう、儲けるためにやっていたのだっけということが起きがちである。原田座長から、平和を観光に使うのかとの意見があったとの話があったが、そうではなく、観光によって平和を広める、あくまで目的は平和の推進であり、そのために観光という手段をしっかりと活用するという整理をしておいた方がよい。何を目的としてツーリズムという手段を導入したのかを忘れないようにしなければいけない。

伝える内容については、これから作るコンテンツは、アプリなのかウェブなのかARなのか、手法は色々あると思うが、それによってどういうターゲットに訴求したいのかということが大切である。平和学の研究者が、Instagramを入口に平和に興味を持つとは思えない。でも、若い高校生や大学生はそこから平和に入ってくるかもしれない。今あるコンテンツも含めて、

深度の深いコンテンツ、比較的初心者向けのコンテンツ、若い人に訴求するコンテンツなど、ターゲットにあわせて整理されると、今後考えていくものも分かりやすいものになる。

(古谷委員(事務局より代理発言)) 将来的には個人がタブレット端末で情報を得ながら動くとしても、少なくとも初期段階ではターゲットを絞り、きちんとした案内をガイドが肉声で実施することが必要ではないか。例えばめいぷる〜ぷの3コースの訪問地でガイドが迎えて案内する体制が整えば印象が深まる。個人でびーすくで動こうとする人に、モデルコースを3種くらい提示して、ブリーフィングをしてあげる機会・場所があればいい。広島テレビの番組審議委員をしているが、来春、広島テレビの新社屋が新幹線口近くに完成し、1〜3階はコンベンションフロアとして会議室や多目的ホールを備えると聞いているので、そのスペースを使うことなど検討されてはいかがか。

(津村委員) ヒアリング調査の中にあった、「第二次世界大戦では、海外でも悲惨な状況があったので、広島がどれだけ悲惨だったということばかり説明しても、外国人と思いを共有できない」、「広島の復興の話はキレイ過ぎる」、「(原爆ドーム以外の)他の被爆建造物の意味は分からないであろう。」といった海外の方の視点の意見が気になった。そういうことを乗り越えて、原爆ドームや資料館以外の被爆建物や関連施設に行っていただかないといけないので、被爆建物・樹木・関連施設の意味をどのように伝えればよいか、関係者で知恵を絞っていかないといけない。古谷委員からの、ポイント毎にガイドが説明する、事前にブリーフィングするというご意見はそのヒントになると思う。

(阪谷委員) 情報発信が多様化してきているので、「これだけ」ではなく「これもある」という選択可能性を広げることが大事であり、情報発信についてもその視点で考える必要がある。渡部委員が言われたアニメーションフェスティバルがよいものなのに情報発信源になっていないのはなぜなのかということについて、芸術・文化の発信性を我々行政がどの程度考えているかということに帰着すると思う。アニメーションフェスティバルも現代美術館も、広島市の関係団体がやっているので、広島市が改めて考えないといけないと思う。

(原田座長) 今、お手元に読売新聞の記事を配付した。先般、神奈川県に行った際に、横浜美術館に寄ってみると、ヨコハマトリエンナーレが開催されていて、無料巡回バスが5つの施設を巡るツアーが実施されている。この新聞記事に「盛況の裏に市民の力」と書いてある。市民ボランティアの方がこの事業をしっかり支えている。「美術展でボランティアスタッフに親切にしてもらった経験から「ハマトリーツ」に志願した」とか、「背景を知ることによって作品がより心に残った。これからは毎回ツアーに参加したい」などとある。ボランティアの中に料理部というグループもあり、付近のおいしい店の案内、活動報告を兼ねた機関紙作り、美術館のカフェで提供するメニューの開発など、多くのボランティアの人々が関わっている。遠足班というのもあり、他の国際展を仲間と調査し現地スタッフと意見交換し、占星術の無料講座を会場で開くなどの活動もしている。職員では専門的になり過ぎる部分をもっと柔らかくし、市民の目線で情報をキャッチして丁寧に対応してくれている。

バーチャルな情報発信については、再オープンした東館の展示にはなじみにくい。被爆体験はアナログな世界であり、あの瞬間に何がおこったのかその事実をそのまま伝えることであり、イメージするものではない。本館を閉館している時期には、十分な発信機能を持ち得てないのではないかと心配している。

古谷委員から広島テレビ社屋を拠点として使ってはどうかとの意見があった。拠点については、中心部に県民文化センターがある。メルパルク、青少年センターなど既存の施設を、拠点施設として使えるようにできないのか。

三鷹や横浜では、駅の近くに芝居小屋を作っていて、繁盛している。芝居だけでなく、若者のコンサートの会場にも使われるなど、色々な事業展開がされている。県民文化センターで神楽が上演されている。あくまで見せる場であり、参加する、触れあうということが必要だと思う。

昨日から、広島駅で手荷物預かり所ができた。対面に対応するというのはとても大事である。長崎では、観光案内所で手荷物を預かってくれると、夕方にはホテルまで運んでくれる。広島駅では、連日のようにコインロッカーがいっぱいなり、そこで外国人旅行者は大きな荷物を持ってめいぷる一歩に乗り資料館に行くが、資料館にもロッカーが少ないようだ。

②丁寧な案内を提供する環境づくり（ルート設定等）について

（原田座長）ルート設定がどんどん先行して行っているように感じられるかもしれないが、ルート設定が一つの大きなポイントではあると同時に、迎える側の体制を作る必要があると思うので、議論を進めていきたい。

海外に行くときマークのついたインフォメーションがあちこちにある。インフォメーションが目立つ所により多くできるとよいと思う。観光案内所はいくつかあり、広島駅に素敵な観光案内所ができたが、旅行会社の窓口や、ホテル・旅館はもちろん、できるだけ多くのところに？マークのついたインフォメーションがあると、広島に来た人が気軽にそこに飛び込んで情報を得ることができる。

（水本委員）提案のルートはよいと思う。最終的には 52 の施設に足を運んでもらって、そこでリアルに感じてもらうのが大事である。52 の施設について簡単なガイドブック的なものがあればよいのだが、ネット上に色々情報があるのでそれとリンクを貼るなど、既存のものを活用するのもよいと思う。そういうところから始めて、最終的に 52 の施設に行ってもらってそこで感じてもらうためのルートづくりであればよいと思う。

（辻委員）来訪者がそこへ行っても、住民がそっぽを向いて、何しに来たのか、ゴミを落としに来たのかと言われても仕方がない。住民の方々の協力を得ないといけないので、このようなことを始めたというのは、住民に対して丁寧に説明するよう準備していただきたい。これだけ網羅しようと思えば力仕事になる。最初は一つでもよいから成功事例として、今まで原爆ドームや資料館だけに足を運んでいる時間が限られている人が、時間が無い中でも、もう 1 か所、2 か所足を延ばしてもらえるような形になればよいと思う。最初から全部というのは難しいし、体制、予算も必要であり、慌てずに段階を踏んでやるべきこともある。広島の平和に対する考え方や取り組み方は性急に結果を求められるものではない。

（渡部委員）広島駅の新幹線側が再開発されたが緑のない空間になってきており、本当に残念である。たくさんの海外から来られた方が、広島市内の緑を見て平和を感じるといわれるが、再開発をするたびに緑が消えていく。以前は広島市でも必ず緑をセットにして建物を建てるようにというアドバイスがあったと思うが、今はなくなっているのか。ルートを作り、市民や商店、ホテルなどに協力をお願いする際、広島が緑と花の町であってほしいので、木を植えたり、植

木鉢を置いてもらうようなこともお願いしてはどうか。そうすることによって、市民の皆さんにもかかわっていただける場面が出てくる。

このルートを支回るとどのくらい時間がかかるのかと大抵の方が思われるので、その情報発信が大事である。もし私が来訪者だったら、この3ルートを皆知りたいと思う。しかし時間が限られているので、1時間のよくばりコースといった、この3つがミックスされたようなルート設定があれば、もっと広島にいたいけど帰らないといけない方に提案ができて、今度来た時には、一つ一つコースを丁寧にまわってみてくださいと言い添えることができると思う。

広島市は被爆体験伝承者の育成をしているが、伝承者の方の発表の場が少ない。伝承者の皆さんには平和を伝えたいという思いがあるので、こういったみなさんに従来の観光ボランティアとは少し形が違うかもしれないが参加していただき、話をしていただくということも考えられるのではないかな。

(平尾委員) 広大のフंक先生も言われているように、巡るときにストーリーがあると伝わりやすい。ルート全体のストーリーなのか、一つ一つの建物についてのストーリーなのかは精査する必要はあるが、建物を見ましようというだけでなく、人を感じられるものがあるとういと思う。

次の市民の積極的な関与につながるのだが、こういうことをする時、広島に来た人がこういうのがあるんですね、と地元の人に話をした時、地元の人の方が知らないということがありがちである。地元の人知らないことほど恥ずかしいことはない。関与の度合いにもよるが、市民自らが歩くよう、学校教育に導入する、平和教育の一環で歩くというような機会をつくり、受け入れる側も知っておく必要があるのではないかな。

(古谷委員(事務局より代理発言)) 実際に通訳案内士として訪日客に接する立場から言うと、広島を訪れる国際客の滞在時間は概ね7時間、長くて8時間であり、初めて広島を訪れる方々には、従来の宮島・平和公園で時間は尽きてしまう。この懇談会の成果を生かすには、広島に宿泊してもらい時間にゆとりがあることが必要である。「広島県観光立県推進会議」において、縮景園の早朝開園、広島夜神楽の公演、東京築地のように広島の魚市場を整備するということを提案しているが、こういったものが実現して宿泊をしてもらって初めて、今回討議している内容が実現に近づくのではないかな。

(前田委員(事務局より代理発言)) テーマに応じ3つの案が示されており、こういうのもあってよいのだが、私自身がどこかを訪れ、その地を巡ってみようとするときのことを考えると、例示されたような一つのテーマで訪ね歩くことはまずなさそうに思う。あるエリアの中で、複数のテーマに触れることのできる設定もあればよいのではないかな。例えば平和記念公園を中心とするエリアで言うと、資料館で原爆被害についてその前後も含め、総合的に知るなど被爆について知るだけでなく、リーガロイヤルホテルなどの高層建物から町の復興を見るとか、平和記念公園内においても、原爆の子の像前の道がカーブしているのは旧西国街道のかぎ型辻の名残だといった歴史を知るなどというように、被爆の痕跡、文学、市民生活の復興などを重層的に見ることができるものがよいのではないかな。

(津村委員) 平尾委員の言われた施設毎のストーリーも知っていただくような取組が求められるのではないかなということに同感であり、その施設で、被爆前にどのような営みがなされていたか、被爆によってどのような被害があったか、人々がどのように乗り越えてきたかなど、コンテン

ツの中でできるだけ丁寧に説明できたらよいと思う。そのために、コンテンツづくりについては観光政策部とともに汗をかいていきたい。

伝承者については課題を認識している。伝承者の活躍の場を広げていきたいと市からも要望し、厚生労働省が、講話のために市外への派遣にかかる旅費・謝礼の経費について来年度の予算要求をしていただいている。うまくいけば、国の財政支援により、活躍の場を広げることが期待できる。このツーリズムの中でも、来訪者と伝承者の接点ができ、伝承者が被爆者になりかわって、被爆者にゆかりのある施設、物語について伝えるという活躍していただくことも可能性としてはあると思う。

(阪谷委員) 渡部委員の言われた、緑についての話に関しては、市では「花と緑と音楽のまち広島」として、単に行政が予算を持って取り組むのではなく、市民の皆さんに花を育てていただく、緑をもっと良くしていただくような取組を進め、そこに音楽という文化的要素を加えたまちづくりを進めている。市民の皆さんと広げていかないといけないと思う。

平尾委員の言われた市民の皆さんと歩いてみるというのは大賛成である。在住外国人を含む市民と一緒に歩いて、知ってもらい、広めてもらう方向がよい。

資料の 18 ページにあるように、このルートを委員の皆さんと時間を合わせて一緒に巡りながら、例えばスマートフォンで発信する内容についても意見をいただきながら、情報発信について考えることができればと思う。

③迎える市民の積極的な関与について

(水本委員) コースができあがり事業が始まった段階で懇談会は解消されるのだろうと思うが、市の中に事務局をおき、ピースツーリズムのうち、「ピース」の分野で市民の方々にボランティア的に関わっていただくだけでなく、「ツーリズム」の部分については商品開発のようなことを経済界にやっていただくなど、役割分担をうまく作っていくことが大事ではないか。

(辻委員) 今後これを進めるにあたり、組織が必要であり、経費もかかる。市としてどのような方向性にするかを示し、広報紙などで広報するなど『見える化』すれば、協力していただける方もいると思う。また、協力してくださいということをきちんと言わないといけない。

(渡部委員) ルートを市民と一緒に歩く企画を立てるなど、市民が参画できる場が増えるとだんだんピースツーリズムが浸透していくと思う。そのことによって、何か自分にできることがあればやりたいという方はたくさんおり、参画していただける人々の年代の幅も広くなると思う。それを受ける体制が大切で、そしてどうすればボランティアとして自分が関われるか、分かりやすいものにすべきである。また、ボランティアとしての役割を狭くしないで、広く色んな役割があるようにした方がよい。本を読む、紙芝居をするなどできることがたくさんある。そういうことの事例をたくさんつくって紹介し、さまざまなボランティアがあることを周知することが大事ではないか。この懇談会に出るようになってから、広島駅に行くときひろしまジン大学の皆さんの後姿にエールを送るようになったが、それまではひろしまジン大学が運営していることを知らなかった。そういう具体的に活躍している姿を皆さんに見ていただいて、「あなたもピースツーリズムのボランティアとして参加していただませんか」、「参加の形は多様です」、「参加の形を逆にご提案ください」という呼びかけをすることがよいのではないか。

(平尾委員) ボランティアに関しては、皆さんのおっしゃるとおりだと思う。あわせて、学校に

おける平和教育との関連もいると思う。少し前に平和における副読本について教育委員会の人達と一緒に取り組んだとき、誤解を恐れずに言うと、平和教育は行き詰ってきているような気がした。ビジョンが先生達の間でも共有しきれていないところがある。案内する人を養成する、多くの人達を受け入れる現場を実際に体験するために学んだといった、アウトプットの場、人材教育の場としてピースツーリズムがうまく機能したらよいのではないかと思う。教育関係者まで含めるとステークホルダーが増えて大変になるが、そのようなことが長期的にからめられたら、人づくりの循環ができるのではないかと思う。

(津村委員) 丁寧にはっきりと、協力してくださいとお願いをしていくことは必要だと思う。ボランティアのあり方を多様に広くというのも大事な視点だと思う。これまでの懇談会でも、市民にとっての学びの機会という意見があったが、そういう視点は非常に大事であり、今平尾委員が言われた平和教育に長期的にからめられたらというところにつながると思う。

(阪谷委員) これまでの話を聞いて、中と外の連携の難しさを実感している。中の連携については、行政の中で、このピースツーリズムを平和と観光の部署が連携する形でやっているが、教育については教育委員会、緑については都市整備局といろいろあり、行政の中で横の連携を図らなければ上手くいかないという認識を職員一人一人に持たせないとこの事業は成功しない。

外の連携の難しさは、組織をどうしていくかということである。できれば既存の組織にお願いできないかという思いはあるが、渡部委員の言われた、本を読む、紙芝居をするということについては、組織とは別に、地域の皆さんの協力なくしてはできない。ピースツーリズムは平和を考えることと同時に地域を考えることでもある。地域を考えることは平和を考えることであり広島未来を考えることでもあるという結びつきをどうやって市民の皆さんと共有してそれにふさわしい体制をつくっていくのかという難しさがあると思う。

(原田座長) 伝承者についての発言があったが、被爆体験証言者の立場からすると、被爆者はもっとがんばってほしいと思う。全焼全壊区域(半径 2k m 以内)で被爆した直爆者は、1 万 4~5 千人くらいだと思う。そのうち証言活動をしているのは 150 人くらいである。つまり、1%ほどしか証言していない。報道機関も探してくれて、やっと発言するようになってきている。伝承者は証言者に代わって次の世代を担っていくので、もっと伝承者の研修が必要だと思う。内容に抑揚がなく、感情が出てこない。証言者は、自分の体験だから感情がどんどん出てくる。養成にあたっては、数を増やすことよりも、内容を深めていくことが必要である。

平和行政の推進にあたっては、行政と市民をどう結びつけるか。もっと市民の力が結集されることになれば、この事業が強く展開していけることになる。

アジア競技大会の開催時に 42 の国・地域から選手・役員を迎えた。そこでは、1 館 1 国運動を実施した。各公民館が、例えば韓国はある公民館が担当するなど、地元で受入れ・応援体制を整えた。各学区においてその国・地域を応援するというもので、大きな成果があった。大邱広域市との姉妹都市提携については、広島で韓国の選手・役員を温かく受け入れたことによって、韓国のオリンピック委員会が日本の都市と姉妹都市提携するならば広島としたらどうかという発言があり、提携につながったと聞いている。取組の一つ一つが、国内外からお迎えする方々への大きなよりどころになるのではないか。

もう一つ提案したいのは、広島市職員の中にも平和行政に関心を持っている者も多く、何らかの形で関わりたいという気持ちを持っている。このような職員達の力を借りて、ピースツー

リズムの組織をサポートできるようなチームができればよい。まずは行政の内部から力を出していく。その力を持って市民に発信していくことも大切ではないか。

水本委員が、この会合はこれでおしまいかなと言われたが、懇談会でとりまとめた結果がどういう形で成果につながっていくのか、このメンバーで検証できるような方向付けができないだろうか。言いっぱなしの議論ではなく、しっかりと議論し、その成果を見える形にしていけば、市民や行政の中にも根付いていくのではないか。

(事務局) 本日いただいたご意見・ご提案を踏まえ再度資料を整理していきたい。資料 26 ページにあるとおり、次回の懇談会は、本日お示しした 11 月中に実施予定の現地調査を踏まえ、12 月中旬までに開催したい。後日、事務局から日程調整の連絡をさせていただく。